

---

# 身代わり王女の恋物語（なろう版）

みきまろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

身代わり王女の恋物語（なろう版）

### 【Zコード】

N9127Z

### 【作者名】

みきまろ

### 【あらすじ】

故郷の村を焼かれ、生きるために国を作り王となつた男と、歴史ある大国の王女として、和平のためその男に嫁ぐことになった王女との恋物語。以前グループサイトに投稿したものに、（こりずに）大幅に加筆修正したものです。ヒロインの登場は第二話からになります。

# 1 大陸歴五回三一年～オーレリア村～

「ラウル、起きなー、朝だよ」

村の朝は早い。

夜明けとともに祖母に起こされた、ラウルは眠い目をこすりながら家の隣に建てた鳥小屋へと向かう。十数羽の鶏たちは、ラウルが来たのに気付くと、小屋の入口につめかけて騒ぎ出した。

「ほいよつと。今出してやるからな」

ひっかけるだけの錠をはずし、扉を開ける。

「うわー」

ばさばさー

羽毛が舞いつ。

鶏たちはギヤツギヤツとけたましい音を立てて、庭に駆けて行つた。

「やれやれ。

お、今日はたくさんあるな」

鶏たちが出て行つた小屋の中には、新鮮な卵が産み落とされていた。持つてきた籠に卵を拾つて入れ、小屋の掃除をする。

さらに庭で虫や草をつついでいた鶏たちにえさをやり、卵を台所に置いて畑の見回りに出た。

道端に咲く、名もない野花。

村人が丹精込めて育てている畠の野菜は、日の光を受けてつやつやと輝いている。

その畠の向こう、柵で覆われた場所では、朝露に濡れるやわらかな草を山羊が食んでいる。

ラウルは村の一番外側まで来ると、村を守る防護囲いが壊れていなか、夜の間に獸に荒らされていないかなどを調べた。

そして、村の端にある両親の墓に道で摘んだ花をたむけ、祖母の待つ家へと足を向けた。

朝日に輝く、のどかな村の風景

この村に生まれて十四年。毎日見てきた景色だつたが、それが永久に続くものではないことを、ラウルは知っている。

戦争だ。

小国の諍いから始まつた戦争は、周りの国を巻き込み、だんだんと大陸全土へ広がりを見せていた。

軍備のために少しずつ税が重くなり、大人たちは徴兵される。初めは遠い国のことと思っていたが、ラウルの住むここオーレリア

村にも、少しずつ影響が出始めていた。

今はもう、15歳以上の男はない。

年寄りと子どもだけになったこの村で、自分にできることは何か。そう考へて、彼は村の見回りを自らの日課としていた。

「おはようさん、ラウル」

もうすぐ家だ、朝飯はなんだろうと思いつながら歩いていると、隣人に声をかけられた。

「おはよう、ダンじいさん。

東の繩が少し緩んでたから、直しておいたよ。」

「おお、ありがとう。こつも見回つ」苦労じやの。

最近このあたりも物騒でなあ。囮いを強化しようかと話してある。わしらだけじやとてもおいつかんで、その時は手伝いを頼むよ」

「わかつた。ティエリーと一緒に行くから、声かけてくれ

「助かるわい。よろしくな

手を振つて、ダンと別れる。

家の木戸を開けたところで、今度は先ほど話に出てきたティエリーがいるのに気が付いた。

「やあ、ラウル

「よお。おはよう。こんな朝早くからどうした

「いや……

ラウルの家の裏にある大木の陰から出てきたティエリーは、何か言いたそうに口を開いた。

朝から待ち構えているくらいだ、よっぽどことがあったのだろうと思うが、無理に聞きだすのも悪い。

ひとまず、ラウルはダンに頼まれた件を伝えることにした。

「あのな、ダンじいさんが囮いの強化を手伝つてほしごつて言つた。

後で声がかかると思つた。

「ああ、そうか。

うん。それはいいんだ。それは……

顎に手を当てて地面を見つめるティエリー。

明るい茶色の髪が、さらっと頬にかかる。

真っ黒で頑固な直毛のラウルの髪とは大違いだ。

違うといえば、大雑把なラウルと違い、優しげで人当たりの言いティエリーは、村の女たちにとてももてた。

戦争で、若い男をとられた村の婚姻事情は深刻だ。

ラウルより一歳上の十五とはいえ、村で一番年かさの男であるティエリーは、すでに女たちに狙われていた。

もしかして、そっち方面の悩みだろうか。  
だとしたら俺は役に立てないぞ。

妙に焦りつつも、ラウルは年上の友を気遣う。

「ティエリー？ どうした？」

「……なんでもない。心配かけてごめん。  
そうだ。もうすぐ剣が打ちあがるんだ。  
出来たら一番に知らせるからな」

「うん、楽しみにしてる」

手を振つて、ラウルはティエリーが家に帰るのを見送る。

ティエリーの父親は、村で唯一の鍛冶職人だった。

なかなかにいい腕で、時には打つた剣を都に納めることもあった。  
けれどこの前の冬に、その腕を買われて徴兵されてしまった。  
村で剣を必要とする事はないが、鋤や鍬は使う。

壊れた農具の修理ができる人がいなくなり困った村人を見かねて、  
ティエリーが見よが見まねで修理を始めた。

父親の手伝いをしたこともあったようで、その出来栄えはなかなかのものだった。

すると、そのうちに剣を作つてみたいと言い出した。

ティエリーは父親が残した道具や材料をかき集めて、修理や畠仕事の合間にこつこつと鍛え始めた。

そうして作った初めての一振りが、もつすぐできあがるといつ。

「できたら、触らせてくれるかな

足元の枝を拾つて構える。

ひゅつ

何とも頼りなげな軽い音がした。

ティエリーには自分の道がある。

俺には、村の見回りや手伝いくらいしかできることがない。

ひゅつ

ラウルは、枝を振るう。

何度も、何度も。

胸にくすぐる思いを断ち切るよう

「ラーウル、どこ行つたんだい！

朝飯だよー！」

祖母が呼ぶ声が聞こえた。

「はあー、今行く！

ラウルは枝を放ると、祖母の待つ家に駆け戻った。

ある日の夜、村に火が放たれた。

ラウル！ ラウル、どこだい！」

「おまえ、いいだー。叶へ。逃げよウ。」

ラウルも祖母の手を引いて、家を飛び出す。

事の発端は、昼間村にやつてきた、見慣れぬ5人の男たちだつた。皆一様に疲れ果てた顔をして、どこの国の中かわからない、ちぐはぐな軍装に身を包んでいた。

自分たちは、戦地から逃げてきた。

一夜の宿と食べ物を恵んでほしい、と言つた。

氣樂に暮りす馬鹿どもぬつ

おまえらに戦争の苦労がわかるか！」

ところかまわす剣を振り回し、もうすぐ収穫を迎えるはずだった作物を荒らすのは、毎晩子どもに会いたいと泣いた男。他の男は、家々を回り、金田のものや食料を強奪していく。逃げながらも、ラウルは男たちの様子を田で伺う。

……一人足りない。

「きやああああ！」

やめてっ、やめなさい…

「へへっ

気の強い女は嫌いじゃねえよ。

ほれ、逃げてみろ。逃げてみろよ」

悲鳴を聞きつけて振り向けば、いないと思つた男が見事な金髪の女の手をつかんで、引きずり回していた。

つかまれているのは、ダンの孫で今年十七歳になるアーティだ。

「や、やめろ、孫に手をだすな」

「うぬせえ、じじい！ 引っ込んでろー」

どかつ

男がダンを蹴り倒す。

腹を押されたダンは、地面に横たわって動かなくなってしまった。

「おじこちゃん！ ああ……」

「くくっ。

女あ。さつきまでの威勢はどうした。

そつさ、弱いもんは強いもんに逆らつちゃいけねえんだよなあ

男は、下卑た笑いを顔に浮かべると、アディを物陰へと引きずつて行つた。

「おばあ、村の墓地まで歩けるか。  
そこで待ち合わせよ！」

「ラ、ラウル。

おまえ、どこへいくんだい。まさか……」

「村の人気が襲われてるのに、ほつとけないだろ？」

「や、やめておくれ。

アディ《あのこ》はかわいそつじゃが、おまえまでいなくなつたらわしさ……」

「おばあ、後でな！」

「ラウル！――」

祖母が叫ぶ声を背中で聞いて、ラウルは男が消えた方向へ向かう。途中、倒れたダンを抱き起して、手近な塙に寄りかかる。腹は痛そうだが、大丈夫、命に別状はなさそうだ。

「ダンじいさん！  
アディのことは俺にまかせろ！  
村の墓地で待つてくれ」

「ああ、ラウル……ラウル……頼んだぞ……」

弱々しく上げられた手を、ぎゅっと強く握つてから、ラウルは駆け出した。

くそっ

あの男、どこへ行った。

近くの家の裏にはいなかつた。

炎に照らされる村の中を、必死に走る。

親とはぐれた子や道端で放心している村の女などと、墓地へ向かうよう声をかけながら、武器になりそうなものを探した。

「ちつ

こんなものでもないよつましか

落ちていた鎌を拾つたその瞬間、

すぐそばの小屋の中から叫び声がした。

「アーティー！」

夢中で田の前の木戸をけやぶる。

そこで見たのは、殴られたのだろうか、頬を腫らしつつも男を睨みつけているアーティーと、彼女にのしかかり、醜い尻をさらす男の姿だった。

「アーティー… 何してやがる…」

怒りで、田の前が真っ赤に染まつた気がした。

無我夢中で、手に持つた鎌を力いっぴい男の肩めがけて振り下ろす。

「ああああああ！」

鎌を肩に突き刺したまま、男がもんどうつた。  
その隙に、アディの手をとり引き寄せる。

「アディ、早く、こっちだ！」

大丈夫？ 何もされてない！？」

「ああ、ラウル、ありがとう。まだ何も……」

がくがくと震える彼女は、それだけ言うのが精一杯の様子だった。

「よかつた！ 立つて、ほら！」

衣服を引き裂かれ、大きく開いた胸元に上着をかけてやる。  
自分より頭一つ背の高いアディの腕を肩に掛け、なんとか立たせて  
逃げ出そうとしているところ

「こんのくそがきがああつ  
なめた真似しゃがつて！……！」

さつきの男が肩から抜いた鎌をもつて、襲いかかってきた。  
足元に落ちていた棒で応戦する。

「くそつ、アディ、村の墓地だ！ 村の墓地へ向かって！！」

「ラウル、だめ……。」

足に力が入らない」

いつもは強気のアディも、恐怖のため腰が抜けてしまったのか。  
小屋の隅に座り込んで、動けそうにない。

「ぐつ」

鎌の切つ先が、ラウルの首筋をかすめる。  
棒の先で男の胴体を突いて、少しでも自分たちから離そうとするが、  
だんだんと、アディ共々小屋の隅に追い詰められた。  
男が鎌を振り上げる。

これまでか。

おばあ、じめん。

アディを背中にかばって、ぎゅっと口を閉じた。

「ぐはつ」

「ラウル！」

血しぶきがどぶ。

アディがラウルの背中をつかむ。  
どさりと鈍い音がして、倒れたのは  
男のほうだった。

「大丈夫か！？」

「ティエリー！ あ……。助かった」

ラウルがほおと長い息を吐く。

男は、背中を斜めに切られて絶命していた。  
ティエリーの手には、血に濡れた一本の剣。

「それ、もしかして」

「ああ。夕方、打ちあがったんだ。

明日おまえに見せようと思つてたんだが、こんなことになるなんて」

軽く振つて血を払い落し、ティエリーは剣をラウルに渡す。  
そしてアディの体の下に腕を通すと、よいしょと抱き上げた。

「アディ、怖かつたな」

「ティル、ティル……」

アディは、泣きじやくつてティエリーの首にしがみつく。  
ラウルはといえば、男の死を確認し小屋の外の様子を伺つてから、  
ティエリーに向かつて顎をしゃべつた。

「生き残つた人たちは村の墓地に向かつてゐる。

俺たちも行こう

「ああ。

その剣はおまえが持つていってくれ。  
わざと俺よいつまく使えると思つ

「ティエリー?」

「ふつ

知らないとでも思つてたのか？

毎日こつそり家の裏側で素振りの練習をしていただろう。

それはおまえの剣だ。

おまえのために作つたんだよ」

そうだつたのか。

両親が死んでから、一生懸命俺を育ってくれたおばあ。

いつも温かく声をかけてくれる人々。

俺に懐いてくれる村の子どもたち。

いつかこの手で守れるようになりたいと思つていた。

そんなラウルの想いを、友はわかつていてくれた。

「ありがとう、ティエリー。

大事にする」

「ははつ

初めて作つたからな。強度はわからないぞ。

切れ味は……まあ、さつき見た通りだ

」

絶命した男の傷口を見る。

ぱっくりと割れたそこは、黒ずんできた血の間に、白い骨をのぞかせていた。

一撃でこの威力。

軍に徴兵されるほどの職人の息子は、確かな技を受け継いでいた。

「急げ！ みんな待つてる」

「ああ！」

ティエリーに声をかけて、小屋を出る。

剣を持つ手に力を込めて、ラウルは祖母の待つ墓地へと駆け出した。

時は流れ

「ラウル、そろそろ時間ですよ」

山積みの書類に署名を書きなぐっていたラウルに、ティエリーが声をかけた。

「……ちつ、面倒くせえな。」

がりがりと頭を搔くと、勢いをつけて立ち上がる。

「あなたね、仮にも王様になつたんだから、もう少しあと上品になさい」

「つるせえな。上品な王様がよけりや、おまえがやれ」

あの日。

村を出た二人は、一つの国を作った。

国の名は、村と同じ、オーレリア。

その執務室には、一振りの剣が飾られている。

今見れば、材質こそ良いものであれ、決してほめられた出来ではない。

装飾の一つもなく、重さのバランスもいまいちだ。

しかし、この剣がここまでの一を支えてきた。

「ようやくいじつけた和平ですからね。へまをしないでくださいよ」

「はつ

自分の名前くらい書けらあ」

執務室の扉が開く。

彼らの悲願が、目の前にあった。

## 2 大陸歴五六 年／テナーシュ

デナーシュ王国の第一王女、リュシエンヌが死んだ。遠乗りに出かけ、飛び出してきた子兔を避けようとして落馬したのだ。

運悪く、リュシエンヌが落ちた先には、藪の影になつてわからなかつた崖があつた。

全身を打つた彼女は、そのまま亡くなつてしまつた。

「リュシエンヌ……。こんなことになるとは……」

デナーシュ城の地下にある、王族の墓所。

リュシエンヌの兄で、若き国王でもあるリシャールが、妹の棺を愛おしそうに撫でている。

リシャールが知らせを聞いたとき、彼は国境近くの街道にいた。そのときはまだ、妹が怪我をしたようだ、としか聞かなかつた。怪我と聞いて思い浮かべたのは、リュシエンヌではなく、もう一人の妹リゼットだ。

今年十八になるリゼットは、何歳になつても落ち着きがなく、城を抜け出してもそこそこに擦り傷を作つて帰つてきた。

大方、今回もお忍びで出かけて足でもひねつたのだろう。そう思つた。

何せ、裁縫と読書が趣味であるリュシエンヌと違い、リゼットの趣味は狩りだった。

森に分け入つては、兎や鳥を獲つてくる。

そんなことをする王女なんて、どこにもいない。

城の料理人は新鮮な食材を喜んでいたが、リシャールにとつては頭の痛い行動だつた。

だから、彼は国境での仕事を終えてから城に戻った。

仕事とは、街道の安全確認である。

通常なら警備隊のものにやらせることだったが、この道は、リュシエンヌが一週間後の婚儀の日に通る道だった。

そう。

リュシエンヌは、一週間後に婚儀を控えていた。

十五年続いた戦争で大陸一の大國となつたオーレリア国の中の若き国王

と。

### 十五年戦争。

今ではそう呼ばれる戦争が終わって早四年。

大陸中を巻き込み、たくさんの命が落とされた。

唯一の中立国であったデナーシュも、戦争とまったく無縁でいられたわけではなかつた。

リシャールたちの父、すなわち前国王は、戦争が終わるまでずっと心を痛めつづけた、やっと終結した一年後に病に倒れ、はかなくなつた。

さらに一年後には、王の後を追うように、王妃も亡くなつた。

それゆえに、二十七歳という若さでリシャールが即位した。

十五年戦争の戦勝国は、戦争のさなかに建国の宣言をし、ぱらぱらになつた国々をまとめてあつという間に力をつけた、オーレリアだつた。

オーレリアは、勝利を宣言するとすぐて、敗戦国に戦争の賠償を求めた。

敗戦国は、大小合わせると二十以上にのぼつた。

それらとオーレリアが個別に条約を結んでいては、どれほど無理難

題をふつかけられるかわからない。

敗戦国の国王たちは、ない知恵を絞つて話し合い、結果、『デナーシエ』を頼つてきた。

すなわち、唯一の中立国である『デナーシエ』が、敗戦国のまとめ役となり、オーレリアと交渉をしてくれないかと。

『デナーシエ』に、それを引き受ける義理はなかつた。

しかし、『戦勝国』<sup>オーレリア</sup>と敗戦国が『こたごた』している間に、戦後二年がたち、父王は倒れ、いまだ落ち着かない大陸の様子に人心が荒れ始めていた。

即位したてのリシャールは、敗戦国である多くの國々に貸しを作ることを目的とし、代表を引き受けた。

#### 和平交渉の日。

使者を通じてある程度のやり取りはしていたが、リシャールは内心不安だつた。

敗戦国側がこれ以上出せないと黙り提示してきた金額は、賠償とするにはあまりにも安すぎた。

さらに『デナーシエ』からは、和平の象徴として、『デナーシエ』の王女との婚姻をあげていた。

地盤を固めたいリシャールにとっては、妹を嫁がせてでも、オーレリアとのつながりが欲しかったからだ。

そんな見え透いた手を、オーレリア側はどうとるか。

交渉の為、『デナーシエ』城にあらわれたオーレリアの王は、若かつた。たぶん、リシャールと同じくらいの歳だ。

髪は黒。マントも黒。

引き締まつた体を包む軍衣も黒で、瞳だけ真っ青だった。

気に入らない。

一目見て、リシャールはそう思った。

今は王を名乗っているが、所詮戦争のどんぐりに紛れて起った王だ。  
どこの馬の骨かわからない。

その証拠に、言動は粗野で、上品さのかけらもない。  
三百年以上の歴史をもつテナーシュの王城において、少しも委縮する様子もなく、自信に満ち溢れた表情をしているのも気に入らない。さらには、もつと気に入らないのが、その瞳だ。

森の湖を思わせる青い瞳は、はじめは挑むようにリシャールを睨んできた。

なんだと思って睨み返したら、つぎは嘲笑するように細められた。  
そして最後は満足そうに、リシャールを見つめてきたのだった。

こんな奴に大事な妹をやるのか。

国の為、己の治世のためとはいって、リシャールは少し後悔した。  
オーレリアの王のほうから難癖をつけてくれればいいとさえ思つた。  
しかし、オーレリアの王は、安すぎる賠償金にさえ文句一つつけることなく、和平に調印<sup>サイン</sup>をした。

そうして迎えた婚儀。

二人いる妹のうち、どちらが嫁ぐかという話になつた。  
すると、当然のようにリュシエンヌが自ら嫁ぐと言つた。  
王族の務めであるし、年も自分が近いから、と。

リュシエンヌは、二十二歳であった。

婚儀の準備は着々と進んだ。  
あの日の連絡を聞くまでは。

「兄様、あの……」

「一。」

リュシエンヌの棺の前でリシャールが物思いにふけっていると、背後から遠慮がちに声をかけられた。

驚いたリシャールが振り返る。

「ああ、リズ。おまえか……」

墓所の入口には、惄然とたたずむリゼットがいた。

「じめんなさい。お邪魔だつたかな」

「いや、じゅうじこい。話がある」

「話？」

リシャールが国境から帰ってきたとき、妹たちのびきりの出迎えもなかつた。

もう夜なのに城にいなのはおかしと思つたら、つきつきついで怪我人の看護をしているのだという。

そんなに酷い怪我だったのかと、リシャールは旅装を解く間もなく見舞いに行こうとした。

しかし、妹の部屋にたどり着く前に、老体をかがめて平身低頭するオズバーン侯爵に遭遇した。

オズバーン侯爵家は、デナーシュ王家に継ぐ血筋と権力を持ち、父王の代から家族ぐるみで付き合いのある男である。

なぜそんなことをするのかと聞けば、未だ誰にも秘密にしているが、王女は怪我をしたのではなく死んだのだという。

『死んだ！？ どちらが？』

そう尋ねたときのリシャールは、兄としてではなく王として頭を働かせていた。

『……リュシエンヌ様でござります』

『そりか……』

『わたくし私がついでいながら……。』

誠に申し訳ありません』

遠乗りには、リシャールが国境に向けて旅立った日に、リュシエンヌトリゼットで連れ立つて出かけたのだという。

付き添いは、オズバンド侯爵家。

リュシエンヌたちは、姉妹の最後の思い出ことオズバンド侯爵に遠乗りをねだり、オズバンド侯爵も快く引き受けて、家をあげて警護にあたつたという。

しかし、事故は起こつた。

『此度の責任、どうとるつもりだ

『はつ。陛下の御心のまま、どのような処分も受けれる覚悟でござります』

たとえ王女たちの望みだったとしても、髪の毛一筋とて傷をつけたら大問題だ。

それどころか今回は、王女の一人が死んでしまった。  
責任をとって、侯爵本人は断首。

家督を取り上げ、一族の国外追放あたりが妥当か。

『そりか。追つて、沙汰を知らせる。

とりあえずは、婚儀をどうするかだな』

腕組みをし、思考をめぐらせる。

答えはすぐに出了た。

『陛下……。

僭越ながら、まだ発言を許されるのであれば、方法は一つしか

『わかつてゐる。それしか方法は、ない』

和平の調印では、“デナーシュの王女”としか約束しなかつた。  
しかし、そのあとリュシエンヌの絵姿を、オーレリア側に送つてしまっていた。

国同士の婚姻では、盛大な披露宴やパレードが行われることが恒例だ。

その際に、花嫁の髪の色や瞳の色に合せて、調度品や花が選ばれる。  
リュシエンヌの髪は黒。リゼットの髪は栗色だった。

さらに婚儀一週間前ともなれば、互いの名前入りの記念品なども作  
られているはずだった。

いまさら、下の妹が嫁ぎますとは言つていい。

『リゼットを、リュシエンヌの身代わりとして嫁がせよ!』

「兄様？ あの、話つて？」

「ああ。

リズ、一週間後、おまえが第一王女としてオーレリアに嫁げ

「……。」

リュシーンヌの棺の前。

そう告げた兄に、リゼットは驚く。

「それは、姉様のふりをしてつて」と？

「そうだ」

兄の言葉にリゼットが戸惑つたのは一瞬だった。すぐ口へいつとつなづく。

いくりおでんばとはいえ、リゼットもテナーシュの王女だ。ある程度予想をしていたのだろう。もしかしたら、リシャールが帰つてくるまでに、オズバンド侯爵と話をしていたのかもしれない。

「急な話で悪いな」

「ううん。私も王女だもん。

この婚儀がどれくらい大事なものかはわかってるつもり。でも、もしあちらの方に気づかれたら……」

「そこはおまえ次第だ。つまくやつてくれ

「……わかつた」

けなげに微笑む妹を抱き寄せる。

胸の前で合された両手が、わずかに震えていた。

「リズは、リュシイが落ちたところを見たのかい？」

髪を撫でながら聞く。

昨日の夜、城に着いてすぐにオズバンドに遭った。

その後は対策に追われ、妹の顔を見たのは今が初めてだつた。

彼女はリシャールがリュシエンヌの死をどうするかを決めるまで、城の奥に身を隠していたのだ。

リュシエンヌの死を隠し、リゼットの存在を隠し、王が戻るまで待つた。

オズバンドの采配だつた。

「私、姉様の前を走つていたの。

悲鳴が聞こえて、慌てて戻つたときには、姉様も、姉様の馬の姿もなかつたわ。

オズバンド侯爵様が駆けつけて、みんなで見つけたときには、もう……」

「そうか。このことを知つているのは、リズとオズバンドと、オズバンド家の従者だけだつたな」

「うん。

あの、オズバンド侯爵様はどうなるの？ 遠乗りについてきてくれた従者たちは？

兄様、まさか口封じなんてしないわよね？

私が、私が悪いの。

姉様を遠乗りになんて誘つたから……」

遠乗りは、リズが言に出したことだったのか。

肩を震わせ、涙を流す妹を抱きながら、リシャールは得心がいった。さして好みでもないのに、この大事なときに遠乗りにでかけたりュシエンヌ。

よりによつてリシャールがいないときに出かけたのは、普段リゼットの奔放ぶりにいい顔をしていなかつたからか。

姉と遠乗りなんて、リシャールに言つたら許してくれないと思つたのかも知れない。

でも、どうしても最後の思い出に行きたい。

オズバンドは、そんなリゼットの心情を察して、付き添いを引き受けた。

陽光の下、楽しそうに馬を走らせる一人を、年老いた侯爵は微笑みながら見つめていたことだらう。こんなことになれば、姉妹のいい記念になつたはずだった。

「処罰は、まだ考え中だ。

しかし他の貴族の手前もあるから、そう軽いものにはできないな

「……そう。そうよね……。ああ……」

苦しそうに息を吐くリゼットを、リシャールは優しく撫でる。

ふわふわの綿毛のような髪と妹のぬくもりが、少しずつ彼の心に兄としての悲しみを呼び起こした。

「リュシエンヌ……。

死んでしまったのか

「……」

リシャールはリゼットを離すと、そつとリュシエンヌの棺に手を掛けた。

「まだ、顔を見てやつていなかつたな」

「あー。」

「おひつと蓋をあけよつとして、釘が打たれていのに気付いた。

「なんだ？ ビリヒてもう封じてある？」

「通常、埋葬までは開くよつこじてあるはずだが」

「あの、兄様。

実は姉様のお顔は、崖から落ちた衝撃で酷く腫れてしまつていて……。

私が、さうしてくれるよつてお願いしたの。

みんなに、一番きれいなお顔で覚えていてほしいと思つたから

そんなに酷いのか。

見れば、釘がしてあつたのは上半身だけで、蓋の途中に切れ目が入  
れてあり、下半分は開くよつになつていた。

リゼッとの懇願を受け、リシャールは足元だけを確認する。

見覚えのあるドレス。

リュシエンヌが気に入つてよく着ていたものだ。

そのまわりには、彼女が好きだつた花が敷き詰められていた。

利発で、しつかり者だつたリュシエンヌ。

若くして即位した兄を、いつも励まし支えてくれていた。

あふれそうになる涙を、ぐつとこらへる。  
泣いている場合ではない。

「リズ。もう一つ頼みがある」

「はい」

「リズは”リュシエンヌ”としてオーレリアに嫁ぐ。  
そして”リゼット”は……リュシエンヌの代わりに死んでくれ」

「……はい」

兄と共に墓所を出て、リゼットはリュシエンヌの部屋に行く。  
これからは、リゼットがリュシエンヌとして過ごすためだ。  
扉を閉めると、ほおつと息をついて、革張りの白いソファに身を沈めた。

もうすぐリシャールがリゼットの死を発表する。

遠乗りにでかけて怪我をしたのはリゼットだ。

怪我が悪化して、死んだのもリゼット。

第二王女は死んだことにして、六日後には予定通り第一王女リュシエンヌが嫁ぐ。

「お疲れ様です、リゼット様。

リシャール様の”ご”様子はいかがでしたか」

「コリア……」

最も信頼のおける侍女が差し出したお茶を、身を起こして受け取る。薰り高いお茶は、疲れた心をふんわりと溶かしてくれた。

「リゼットではなくて、リュシエヌよ。  
これからは、私のことはリュシエヌと呼んでちょうだい」

「あ、はい。申し訳あつません」

ユリアはリゼットたちの乳母の娘であり、幼いころから共にそだつた乳兄弟である。

リゼットにとつては、いつも自分の幸せを願ってくれる、優しくも頼もしい、もう一人の姉であつた。  
もちろん、隠し事など何一つできない。  
そう、隠し事なんて……。

「兄様、泣いてたわ。

涙こそ見せなかつたけど、あれは絶対泣いてた。

兄様に……本当のことを言つてあげられたらいいのに

「リゼ……リュシエヌ様。

それは……」

### 3 リュシエンヌの私室にて

兄様に、全て言つてしまえたらいいのに。  
涙をこらえる兄様を見るのは、本当に辛い。

そして兄様が棺に手をかけたとき……。  
あのときはとても焦った。

リゼットは、ユリアが淹れてくれたお茶を両手で挟むように持つて、  
物思いにふける。

思い起こせば一週間前。

姉の部屋を訪ねたときから、すべては始まつた

ことん

と、何か音がした気がして、リゼットは夜更けに目が覚めた。  
永世中立国を宣言し、調和と質素を重んじるテナーシュ国において、  
国王の住まいたる王城もさして大きいものではない。  
物音は隣のリュシエンヌの部屋から聞こえてきたようだつた。

婚儀を二週間後に控え、姉様も眠れないのかもしれない。

そう思つたりゼットは、上着をはおつて寝台から出る。  
主が起きだした気配を察してか、侍女の一人が手に明かりを持って  
扉を開けた。

『一人で大丈夫。姉様の部屋に行くだけだから』

蠅燭の明かりがなくとも、満月に近い今夜は月明りで十分に明るい。

手燭を断つて姉の部屋の前までくねり、ぼやぼやと中から声が聞こえた。

ん？ 姉様は一人ではないのかしら。

月はもうすぐ真上にのぼる。

こんな夜更けに王女の私室に訪れる者が、自分以外にいるのだろうか。

こんこん

控えめに扉を叩く。

息を飲むような気配がしたのは氣のせいか。

『姉様、リズです。リゼットです』

『……リズ……』

やはり、リュシエンヌは起きていた。

扉の間から顔を覗かせ、辺りをつかがうよつとする。

『眠れなくて。

ちょっと話してもいい？』

小さいころは、怖い夢を見たといつてはリュシエンヌの寝所に潜り込んでいた。

最近はあまりなかつたことだが、もつすぐ姉がいなくなると思つと無性に甘えたかつた。

『リズ……そ�ね。

私も話したいことがあるわ。入つて

リュシエンヌは一瞬迷った後、扉を細く開けて妹を招き入れた。

そして、後ろ手で扉の鍵をかけた。

そんなことは今までしたことがなかつたので、リゼットは驚いて姉を振り返る。

『リズ……あなたもう気付いているんでしよう?

昔から勘が良かつたものね』

『気付いて? つて、え? 何を?』

リュシエンヌは、一人納得してしつとりと微笑む。  
リゼットは何が何やらよくわからないが、姉には何か隠し事があつたらしい。

『マルス様、出でらして。妹のリゼットよ』

リュシエンヌは、リゼットの肩越しに室内へと呼びかけた。  
すると続き部屋の陰から、一人の男性が現れた。

部屋の中央まで来ると片膝をついて、リゼットの前で優雅に礼をする。

『……お初にお目にかかります。

オズバンド侯爵家長男、マルス＝ドゥ＝ヴィア＝オズバンドと申します』

そつと乗つたのは、淡い金髪が色素の薄い顔を覆う、線の細い男性だつた。

マルス＝ドゥ＝ヴィア＝オズバンド。

聞き覚えのあるその名に、リゼットは記憶をたどる。  
確か幼いころの、姉の許嫁ではなかつたか。

戦乱の中、いつのまにか立ち消えてしまったと思つたけれど。

『リズ。私が一週間後に嫁ぐことはわかつてゐるわ。  
だから今だけ、わがままを許してちょうだい』

『姉様』

リュシエンヌが、目線でマルス様に立つよう促す。  
マルスはリュシエンヌの手をとると、手の甲に唇を寄せて口づけた。  
嬉しそうに微笑むリュシエンヌ。  
その顔は、デナーシュの第一王女ではなく、一人の恋する女性だつた。

ああ、そうか。

許嫁ではなくなつたとしても、2人はどこかで出会つたのだ。  
そして惹かれあつたのだろう。

戦争さえなければ、誰もが祝福する2人としてそのまま幸せになる  
こともあつたろうに。

『わかつた。今夜見たことは誰にもいわない。  
でも姉様、それでいいの？ 好きな人がいるのに、お嫁に行つち  
やつて、本当にいいの……？』

リゼットの純粋な問いかけに、リュシエンヌとマルスは目と目を合  
させて淡く微笑む。

『私も、王族の義務はよくわかっているわ。周辺国との婚姻と不思  
議の力で、私たちの国は中立国を守つてこられたのだもの。出発の

田までに気持ちの整理はつけるわ』

田の奥に強い意志を感じさせて言い切るリュシエンヌは、今はまた王女の顔をしていた。

そう、『デナーシュが戦乱の中、中立を保つこられたのは、長い歴史の中でうまく諸国にまぎれこませてきた『デナーシュの血と、長い間護りに心血をそいでできた結果得た（といわれている）不思議の力によるものだつた。

でも、恋する心はそんなに簡単に整理などつくるものなのだろうか。恋を知らない私には想像もつかないのだけれど……。

納得のいかないリゼットは、さらに姉に問う。

『本当にいいの?』

リュシエンヌとがうなずき、隣に寄り添う恋人がせつなげに口を開く。

『元々は私の一方的な想いだったのです。それをリュシエンヌ様に受け入れていただけただけでも、身に余る光栄。これ以上何を望むというのでしょうか。

今夜ここを訪れたのも最後のお別れをさせていただくためです』

そつは言つても、からめあう手と手が一人の思いを如実に語つていた。また、いつも側に控えているはずのリュシエンヌ付きの侍女の姿も見えないことから、姉の意志で彼を招いたことは明白だった。

『マルス様、私のほうこそごめんなさい。』

あのときあなたの手をとらなければ、こんなに苦しめることはなかつたのに

リュシエンヌ様……と、マルスの口が動いた。  
しかし声にはならず、次の瞬間、彼の体がぐらりとかしいだ。

『マルス様……』

リュシエンヌが、悲鳴に似た声で恋人の名を呼ぶ。

右膝をつき、肩で荒く息をするマルスは、苦しそうに胸元を押され  
ていた。

『だ、大丈夫です。いつもの発作ですか。

それよりそろそろ戻らないと侍女達もじびれを切らしていくでし  
ょう。

『これ以上あなたに迷惑をおかけするわけにはいきません』

マルスは慣れた手つきで上着の隠しから薬を取り出し、口に入れた。  
水差しを取ろうとする姉を制して、リゼットが水を注いでマルスに  
渡す。

リュシエンヌは心配そうに眉根を寄せ、マルスの背中をさすつ  
いた。

『姉様、彼は一体……』

水差しを戻して姉の顔を伺つ。

リュシエンヌは、ゆるゆると首を左右に振つて、何も答えなかつた。  
月明りが、冷や汗をかくマルスの横顔を照らす。

元々白かった顔色は、今は蒼白といつていいほどになつていた。

『リゼット様……私の命はあともつて半年と医師に言われています。どうせ死ぬのならと思いを告げた私を、リュシエンヌ様は受け入れてくださったのです。

大丈夫。もうすぐ死ぬ身ですから、リュシエンヌ様の思いが残るはずもありません。

リュシエンヌ様、あなたなら素晴らしい王妃となられることでしょう。

静養先の別荘で、あなたの『ご活躍をお祈りしています』

薬が効いたのか、少し顔色のよくなつたマルスは立ち上がって姉様の手に口づけた。

リュシエンヌが旅立つ前日に、彼も別荘に行くのだという。恋人が、違う男と結婚するために出かけるのを見送るのはつらいのだろう。

『マルス様。ああ……。

なぜそんなことをおっしゃるの？

私は同情であなたと過ごしていったわけではないわ。

あなたの死を側で待つなんて耐えられない。

だからこそ、今回の婚姻を受けたのよ。

私は皆が思うような強い女じゃないわ。

あなたの死を乗り越えられる自信がないから、他の国へ逃げようとした卑怯な女なのよー』

『リュシエンヌ様……！』

強く抱き合いお互いの名を呼ぶ2人。

そう、嫁ぐのは別にリゼットでもよいのだ。

それを、リュシエンヌは年齢的にも釣り合つのは自分だといって、進んで嫁ごうとしていた。

その裏にこんなことがあったとは、リゼットは想像もしていなかつた。

いつも落ち着いていて、しつかり者の姉。

その姉が、マルス男性の胸にすがって泣いている。

リゼットは、それほどまでに焦がれる相手に出会えたことを、ついやましく思つた。

だから、つい、口にした。

『姉様、オーレリアには私が行く。姉様はマルス様と一緒にあげて』

言葉にした瞬間、リゼットはこの思いつきがとてもいいもののように思えた。

和平の条件はテナーシュの王女がオーレリアの王に嫁ぐといつことだと聞いている。

リュシエヌが指名されたわけではない。

『リゼットー、何を言つているのー。』

驚きながらもリュシエヌの瞳が揺らぐ。  
きっと、本当は迷っていたのだ。

最後まで共にありたいと思う心と、最後を看取ることを恐れる心。

今まででは國の為という建前で、自分をだましてきた。

『大丈夫、うまくやるよ。  
……いえ、うまくやるわ』

あわてて言い直した。

今まで兄と姉の保護のおかげで自由気ままに育つてきたリゼットは、言葉遣いもまだ幼い……というより荒い。

公式の場ではそれなりに取り繕つてはいるが。

『だ、だめよ。

私の絵姿はもうオーレリアに渡つてゐるし、お兄様だつて、こんなこと許すわけないわ』

リュシエンヌの髪は、腰まで届くつややかな黒。リゼットの髪は、栗色だ。

湿氣が多いと、自然とくるくるとうねつてしまつ猫つ毛が悩みの種で、長いとすぐにからまつてしまつたため、いつも結い上げられるぎりぎりで切つてしまつてゐる。

姉のまっすぐな黒髪があこがれだつた。

瞳の色は同じ棕色。

光の加減で黄色く輝くのが王家の証である。

『髪は染めればなんとかなる。

猫つ毛だつて、いつも結つていればわからないし。

童顔は……うーん、お化粧すればいいかな。

コリアならきっと大丈夫よ』

ユリアは、姉の婚姻に合せて、オーレリアについていくことになつていた。

お茶を淹れるのもうまいが、化粧も抜群にうまい。

オーレリアに向かうのは、リュシエンヌとコリアだけの予定であつた。

あまりにも心細いのではと思つたが、和平の条件でもあつたようだ。婚姻にかこつけて大人數を送り込まれては都合が悪いのだろう。

『リゼット……』

妹の言葉に背中を押され、リュシエンヌは心を決めたようだ。

『「じめんなさい。私がもつと早く話していれば、そんな苦労を背負わせすにすんだのに』

リュシエンヌがあえて今夜リゼットを招き入れたのは、自分が嫁いだ後、マルスの様子を時々知らせてほしいと頼むためだった。ところがリゼットの予想外の申し出に、とんだ方向に話が進んだ。

『姉様、それは違う。

間に合つてよかつた、と嘆ひのよ』

片田をつぶりながら明るく言つた、リュシエンヌとマルスは顔を見合させて、そつと微笑んだ。

「リゼット様、おきれいですわあ……」

ほう、と見惚れるようにため息をつくのはコリア。

リゼットの死を発表してからの日々は、あつという間に過ぎた。今日はもうオーレリアに向けて出発する日。

数時間後の出発を控え、髪を染め、正式な身支度を整えた。

コリアの手による濃いめの化粧をし、ゆつたりと微笑む鏡の中の女性は、自分でも驚くほどに姉にそつくりだった。

「だから、リュシエンヌだつて」

「あら、すみません」

あの夜のあと、コリアに事情を話すると、激しく怒った上で協力を申し出てくれた。

怒りの方向は、主にそれまで秘密にしていたリュシオンヌとマルスの関係にあるようだつたが。

「リゼット様がリュシオンヌ様の振りをするなんて、子猿が人のマネをするようなものと思いましたが、なんとかなるもんですね。」

「いえ失礼、たんぽぼが薔薇になりたがるようなものかしら、それとも、亀が月を田指すよ'ひな……」

「コリア……」

「どんどん例えが酷くなる侍女の言葉に、リゼットはつい半田になつてにらんでしまう。」

そりや、私は姉様とは比べ物にならないくらい、所作も言葉づかいも乱暴だけれども。

お裁縫と読書を趣味とする姉様と、本なんてほとんど読まず、野を駆け回り、兄の田を盗んでは狩りに出かける私だけれども。

「いじいじいじ。」

耳の横に一筋だけ垂らした髪を、つまんですねる。

「あら、いけませんわ、リゼット様。」

「リュシオンヌ様ならこんなとき、いつおっしゃいますわ。」

『猿もたんぽぼも亀もそのものにしかない美しさがあるわ。』

自然が作ったものに優劣をつけようなんて、人だけがもつ卑しさ

よ。

自然を前にしたら私なんて道端の石ころにも満たない小さな存在だわ』ってね

……姉様が石ころなら、私は砂粒だ。

リュシエンヌはさらりと自信をなくす。

あの夜は、とてもいい思いつきに思えた。

しかし、美貌と知性とを兼ね備え、国民の信を一身に受けたりリュシエンヌの代わりである。

本当に自分に務まるのだろうか。

いやいや、大丈夫。

だってオーレリアの王はリュシエンヌに直接会ったことはないのだ。絵姿しか知らないのならばれることもあるまい。

リゼットだって『ナーシュ』の姫であることは間違いないのだから。

「姉様、私、がんばるわ」

鏡の中の自分に話しかける。

化粧をし、リュシエンヌそつくりになつた自分が微笑むと、姉に励まされたような気がした。

姉はきっと今『ごろマルス様と2人で幸せな時を過ごしているだろう。残されたわずかな時間でしかないとしても、その幸せを自分が守つていると思つと誇らしい気持ちになる。

鏡の前で百面相をしていたら、扉が控えめにノックされて、リシャールが来たことが告げられた。

他国に嫁ぐ妹を見送るリシャールも、今日は正装だ。  
王になりたてのころは、なんとなく恰好がつかなかつた重そうなマ

ントや王冠も、すっかり板について堂々たるものだった。

「リゼット……いや、リュシエンヌ。

とてもきれいだよ。どにしても恥ずかしくない、我が国一番の姫君だ」

リシャールが、リゼットの肩を励ますようにたたく。

“リゼット”は死に、すでにあの棺に名が刻まれていた。兄に名を呼ばれたことで、リゼットは、とうとう自分はリュシエンヌとなるのだと実感する。

わかつてはいたけれど、覚悟はしていたけれど、リゼットにも一つだけ後悔していることがあった。

それは、名前だ。

これからリゼットは、リュシエンヌとして生きていく。

“リゼット”と云ふ名前、もう一生名乗ることはない。

“リゼット”。

亡き両親がつけてくれた、私の名前。

兄の手をとり、露台へと足を運ぶ。

わあ、と国民の歓声があがる。

リゼットの死を知り、嘆いてくれた国民たち。

婚儀の前なので、大がかりな葬儀は行われなかつた。

しかしそれの家の前には黒い布が掲げられ、弔意を示してくれた。

今はリュシエンヌの旅立ちを祝福してくれている。

例えそれが政略結婚であれ、幸せなものになるよう。

リゼット　いや、リュシエンヌが手を振ると、ひときわ大きな歓声があがつた。

我らが自慢の姫君を称えて歓声は大きなうねりとなり、國中を包んだ。

この國と民のために。

兄様、姉様のために。  
オーレリア

新しい国でがんばろう。

花びらが舞う中、露台を降りて馬車に乗り込む。

中には、すでにコリアが準備万端整えて待つていてくれた。

「リュシエンヌ。元氣で」

「兄様も」

馬車が走り出す。

人々の歓声を受けながら、王女は祖国を後にした。

和平の調印から一年。

男は、馬上にいた。

「ああ、面倒くせえ」

何度もだろう。またつぶやいてしまった。

今日はデナーシェからの花嫁を迎えて行く日だった。  
この俺に花嫁だと。はつ、ちゃんちゃらおかしいな。

オーレリア国王、ラウル＝オーレリアは、馬を走らせデナーシュとの国境に向かう。

そこで、デナーシュからの警備兵とオーレリアからの警備兵で引継ぎが行われ、王女は侍女一人だけを連れてオーレリアに嫁いでくることになつている。

本当なら、ラウルも仰々しい馬車に乗つて王女を迎えて来るのが礼儀だつたが、そんな面倒なことはしたくないと、騎馬で駆けてきた。

「あれから、もう十七年か……」

五人の男に村を焼かれたラウルたちは、ここを立て直すのはもう無理だと判断して、村を捨てることにした。

村を出て、初めに頼つたのは税を納めていた領主の元だった。

ラウルとティエリーが先頭に立ち、村人を引き連れてようやくたどり着いた館は、もぬけの殻だった。

荒らされた室内。

ところどころ焦げた跡がある。ここも焼かれたのだろう。

不安におびえながらも、村人同士で肩を寄せ合つて領主の館で一晩明かした。

朝になり、長老を中心に、これからどうするか話し合つた。

大陸全土に広がりつつある戦争。

どこまで行つても同じような状況だろう。

それならいっそ、大陸の北にある、永世中立国<sup>デ</sup>ナーチェに助けを求めてはどうか。

皆の意見が一致した。

デナーチェは遠かつた。

途中の被害の少ない村々で、労働と引き換えに小さな子どもを預かつてもらうこともあつた。

どの村も男手は少なかつたから、ラウルやティエリーは歓迎された。村でしていたように、柵を補強したり井戸を直したりした。

ティエリーの鍛冶技術は、どこでも重宝された。

立ち寄つた村で強く引き留められたこともあつたが、たいていは若い衆だけで、故郷の村人全部を引き受けてくれるところはなかつた。

オーレリア村の人々は、デナーチェを目指す。

野宿をすることも多かつた。

山の中で力尽きた年寄りは、仕方なくその場に埋めた。

村を出て数年がたち、ラウルは傭兵、ティエリーは商人の真似事をして、人々の生活を支えた。

その頃には、一緒に来る村人もずいぶん少なくなっていた。

旅の間に、アディが子どもを産んだ。

ティエリーの子だという。

『おまえらいつの間にっ。』

『いや、まあ、なんとこうか……』

『うふん、テイルつたら照れちゃって』

ティエリーは母子をどこか安全なところに落ち着かせようと思つたが、アディは絶対についていくと言つて譲らなかつた。

彼女は持ち前の気の強さで、誰に頼ることなく赤子を守りきつた。結果的に、デナーシュはオーレリア村の人々を受け入れなかつた。ラウルは、あのときの悔しさをいまでも忘れられない。

固く閉ざされた門。

同じように、デナーシュを頼つてきた人々で、城下町を取り囲む高い堀の周りは埋め尽くされていた。

『おばあ、じめん……』

『いいんだよ、ラウル。

ここに来るつて目的があつたから、わしらは今まで生きてこれた。もうおまえも自由におなり。

わしらの面倒を見ることはないんじゃ』

デナーシュの堀際で、むしろを敷いて過ごして5日目。ラウルの祖母は、息を引き取つた。

彼は誓つた。

絶対この国を見返してやる。

自分たちの都合で戦争を起しそう、俺たちを、村人をこんな目にあわせた奴らに復讐してやる……！

ラウルはティエリーと相談して、村からついてきた比較的年長の子どもたちと、デナーシュの城壁前で会った有志で傭兵団を作った。団長はラウルで、武器の調達や渉外などの細々したことはティエリーガが受け持つた。

アディは食料や生活物資などのまとめ役を担当した。三人で力を合わせて、ひたすら生きるために戦つた。

『ラウル。

一介の傭兵団としてまとまるには、この団は大きくなりすぎました。

『国を作りましょう』

金銭の交渉をする際、若いと馬鹿にされるといつて、いつのまにかティエリーはそんな話し方をするようになった。

眼鏡をかけ、落ち着いた物腰で話すティエリーは、年齢不詳でとても胡散臭い感じがする。

ある日、ラウルが冗談交じりにそう指摘したら、親友はこう言った。

『あなたって、あのかわいかつた面影は全然ありませんよ。まったく、こんな筋肉ばかりついて。

少しは頭の中も鍛えなさいね』

『「つむせえよ」

戦争のじたじたで、国の名乗りをあげるのは簡単だった。

国の名前はオーレリア。

故郷の村の名前だった。

どこかの国が放棄した城を根城にして、周辺の国を攻めていく。

少しずつ大きくなつていった国には、助けを求める人々が集まるようになつた。

ラウルたちは、その人々をすべて受け入れた。

デナーシュのように切り捨てるとはしなかつた。

治安や食料のことなど、人が増えるほどに問題も増えて行つたが、いつでも手を取り合つて乗り切ってきた。

お互いをわかりあえる、一番の親友。

オーレリアの王と宰相という立場になつても、それは変わらない。国が落ち着くと、アディは城下町に孤児院を作つた。

ラウルは、孤児院は人に任せて何か役職を、と言つたが、

『そんな柄じゃないわん。

私は私にしかできないことをやるから、あなたたちはあなたたちでがんばりなさい』

そう言って笑つた。

大陸歴五五六年に、十五年続いた戦争が終わつた。

オーレリアは、気付けば戦勝国と呼ばれていた。

気に入らない貴族や、民を守らない領主の治める土地を片つ端からつぶしていく結果だつた。

ラウルたちを見捨てた領主への復讐も、きつちり果たした。あとはデナーシュだつた。

どうしてくれようかと思つていた矢先に、和平の申し出があつた。

大陸の平和のため、諸国と手を結んで協定を結ぼうと。

冗談じやない。

ティエリーは本気で和平を望んでいたが、ラウルは違った。

乗り気と見せかけてこつぴどく断り、恥をかかせてやるううと思った。もしくは、馬鹿高い賠償金をふっかけて、溜飲を下げようと思つた。

戦装束に身を固めて訪れたデナーシュの王城。

あのとき固く閉じられていた門は、大陸一の新興国の王といつ立場を手に入れたラウルの前で、あっけなく開いた。

同じくらいの年だろうか。

虫も殺したことがないような、きれいな顔をしたデナーシュの王は、和平の証しに妹を差し出すと言つた。

辺境の村の出の俺に、デナーシュの王女！

ラウルは、思わず笑い出しそうになつた。

いいだろ？。

デナーシュへの復讐は決まった。

暗い炎を胸に、ラウルは和平に調印した。

国境まであと半刻、といつ小高い丘の上まできて、ラウルは馬を止めた。

丘ごろの鬱憤を晴らすかのよつて馬を走らせてきたため、後続の警備兵はしばらく追いついてはこないだろ？。  
久しぶりの解放感に、腕を伸ばして伸びをする。

視線の先には、国境となる森が見える。

城壁の外。

デナーシュの東西を守るよう広がるその森は、デナーシュでは“天使の森”と呼ばれていたが、他国からは“魔の森”と呼ばれた。

一度足を踏み入れたら最後、他国のは一度と生きてはでられないという、魔の森。

デナーシュの民だけが、その不思議の力を持つて、自在に行き来できるという森。

デナーシュの民が持つ不思議の力は、魔の森をなんなく通過できるだけではない。

王族に至っては周囲の者を癒すことができるという。

切り落としたはずの腕が、王族が手をかざしただけで生えてきたとか、瀕死の者を生き返らせたとか、はたまた何代か前の王は首を切られても自分の首をかかえて悠然と歩いたともいわれている。

そのほとんどは作り話としても、なんらかの力はあるのだろう。自分の目で見たものしか信じないことにしているラウルだったが、デナーシュの民の力だけは信じている。

いや、信じざるを得ない出来事があつたのだ。

時は戦時中に遡る。

『……つ痛つ』

放された矢が腕をかすめる。

いつのまにか隊と引き離されラウルは、一人でこの地を駆けていた。

このままではやられる。

敵の手に落ちるか、魔の森へと逃げ込むか。

二者択一をせまられて、ラウルは躊躇なく後者を選んだ。

少しでも生き残れる方を選ぶのが、戦乱の世を生き延び学んだことの一つである。

生きていればなんとかなる。

何かの気配を感じたのか、森に入るのを馬は嫌がつた。

鬱蒼と茂る森の中は、馬で進むには適さない。

また、馬を逃がせば敵の目をそらせるかもしれない。

そう考えたラウルは、痛む腕を押さえながら鞍に枝を括り付け、上着をかけてあたかも人が馬の背にもたれかかっているように見せかけた上で、馬の尻を叩いた。

甲高いいななきと共に、馬は猛然と駆けだす。

『すまないな。生きて帰れれば、墓くらい作つてやれるかもしれません』

木陰に体を滑り込ませ、辺りをつかがう。

しばらくして追手が馬の逃げた方へ向かうのが見えた。

とりあえずはこまかせたといえよう。

しかし安心するのはまだ早い。

空馬だとばれるのは時間の問題だ。

助けがすぐにつくるともかぎらない。

少しでも身を隠す場所を探して、ラウルは森の奥へと足を踏み入れた。

『誰だ！』

近くに人の気配を感じて、反射的に剣を引き抜いて拵つた。

『わ……！』

浅かつたか。

布を切った感触はあつたが、倒してはいない。  
ラウルは、かすむ目を細めてなんとか相手を見ようとする。  
かなり血が流れたらしく、頭が朦朧とする。

『あの……あなた、ひどいけがをしてるんだ。』

大丈夫、ここは天使の森。

私はあなたの手当てをしていただけだ』

天使の森。

ここをそう呼ぶといつことは憎つつきテナーシェの民か。  
どれくらいの時かはわからないが、ラウルは気を失っていたらしい  
でなければ腕や頭に布を巻かれ、今まで気付かないわけがない。

不覚……！

もしこれが敵の手のものだったら、首をとられていた。

まだラウルの手に握られたままの剣をちらちらと気にしつつも、声  
の主は薬草を足に巻き付け布で押さえていく。

『本当にひどいけが……。一体どうして……』

どうしてもこうしてもない。

苛々とした気分で、ラウルは胸の中で毒づく。

戦争のないお幸せな国の民には、命がけで戦う俺たちの気持ちなんてわかるわけもないだろう。

祖母も友人も失い、頼る国もなく、敵は容赦なく切り捨て、泥水をすすつて生き延びてきた。

俺の元に集まる輩をまとめあげ、ティエリーやアディと共に国を作った。

今はその生まれて間もない国を守るために戦っている。

巨大な国となつたのはいいが、大きくなれば大きくなるほど、わきが甘くなり、目が行き届かなくなる。

今回もそんな火種を消しに出張つてきて、このざまだつた。

ラウルの心中など知るよしもなく、手当は進んで行く。

一通り毒を吐いて気が済んだラウルは、水筒の水で傷を清めている人物の観察を始めた。

ふわふわと揺れる髪は栗色。

背中側で一つにまとめ、細い紐でしばつっている。

皮の手甲に胸当て。背には弓矢。

獵師の子だろうか。

ふと子どもの一の腕に、血がにじんでいるのが見えた。  
さつきラウルが切りつけたところだろう。

人の手当てよりも自分の腕を先にすればいいのに・・・。

そんなことに思いあたり、警戒していた心がふつと軽くなつた。  
あきらかに兵士ではない子どもに、罪はない。

『うん。

緊張していると効くものも効かなくなるからさ。

ここにあなたを害するものはないよ。

ゆっくり休んで』

気を緩めた瞬間、花の香りが鼻先をくすぐった。

鳥の声が聞こえ、森を抜けたさわやかな風が髪をなでる。

ここは天国か……。

いや、そうか、“天使の森”だつたな……。

柔らかな陽光を頬にうけ、ラウルは再び意識を手放した

ぱしゃん……

水音に、のどの渴きを覚えた。

眠っていたのか気絶していたのかさだかではないが、体を休めたおかげで頭はすつきりした。

ラウルは、剣を杖がわりに体を起こす。

自分の体をあらためて見ると、いたるとこひに布がまかれ、ぐるぐる巻きになっている。

縛り方は、どうも器用とはいえないようだ。

それでも、腹と背の矢傷は、そのままにしていたら確実に致命傷だった。

先ほどの子どもはどうこいつたのか。

立ち上がりうと、ぐつと足に力を入れたら、布に血がにじんだ。

……まだ無理はいけない。

それでも喉の渴きをつぶすしたくて、這いつぱいに水音の方へ向かつた。

ぱしゃん、ぱしゃ……

泉は、すぐ近くにあつた。

さほど大きくはない泉の中央で、栗色のふわふわが動いていた。

『おー』

そういえば名前を知らなかつた。  
とつあえず呼びかけてみる。

『……一.』

水浴びをしていた人物は、びっくりしたよつて振り向いて、ぱしゃ  
ぱしゃと音を立てながら、慌ててラウルの方に寄つてきた。

『動いちやだめー』

焦つている理由は、ラウルを心配したものだった。

それとは別の理由で、ラウルも焦る。

『おまえ……女か……一.』

『え……わ……あわわ……』

先ほど服と胸当てで隠れていた場所にはわずかなふくらみ。  
ずいぶんとセセセセだが、腰の細さといい、男とは違つ。

『やだ……あつちむいて！

やこの服とつて……』

なんだか難しいことを要求された。

ラウルは、前者をきれいに無視して服を渡してやる。

『あつちむいてつて言つてるの……』

『あつちを向きながりせひて服を渡すんだ』

当然のことと言われた子どもは、『うう』といつなりながらもわざと服を奪い取った。

そして濡れるのもがまわずに羽織る。

『心配しなくとも、子どもに興味はない。  
それより水をくれないか』

見たところ、12、3歳といったところか。

すらりと伸びた手足が子鹿のようだ。

ラウルが泉で顔を洗つて、子どもはどこからか水をたっぷり入れた水筒を持ってきた。

『奥の岩場から湧き出てるんだ。

この水を飲むと10年寿命が延びるといわれてる

傷もこの水で洗つたから、あつとすぐ元気になるよ、と無邪気に笑う。

『……痛つ

子どもが、水筒を差し出さうとして急に顔をしかめた。  
左腕を押さえる。

『さつき俺が切つたところか。すまなかつた』

『つづん、大丈夫』

腰にぶら下げた鞄から乾燥させた薬草を取り出す。

泉の水に浸して軽くもんでから、袖をまくって傷口に塗りつけた。  
右手と口を使って布を巻きつけようとするが、なかなかうまくいかない。

やはりこの子ども、かなり不器用である。

『貸せ。やつてやる』

ラウルは、自分の傷も痛むが、なんとも見ていられなくて手をだした。

子どもと違い、手際よく布を巻いていく。

『ありがとう。上手いね』

素直に感心する声に、なんだか背中がむずむずした。

『おまえが下手すぎるんだ』

だからついそんな言葉が出た。

すると、ふわふわの子どもは、むつとすねたように頭をつきだし、  
横を向いてしまった。

幼い動作が笑いを誘う。

『……へつ……せせ、せせせせせ』

ラウルがたまらず顔をあげて笑う。腹の傷にひびくが、一端笑い出したら止まらなくなってしまった。こんなに笑ったのはしばらくぶりだ。

『な、なんだよ。そんなに笑うことないだろー。ちゅうと……おこつたら……』

からかわれたのがわかつたのか、子ビもは真つ赤になつて怒つている。

栗色のふわふわと相まって、毛長の子猫が一生懸命自己主張しているようになんとも愛らじい。

『いや、すまない。……へつ。へへ……。

おまえは命の恩人だ。

今は何の礼もできないが、落ち着いたらオーレリアの城に来てくれないか。

俺の名はラ・・・』

『ちゅうとまつて』

名乗らうとしたのを、子ビもは止めた。

『じめん、気持ちはうれしいけど、私は傷ついたあなたをほつとけなくて手当てしただけ。

デナーシュの民なら誰でもいいとするよ。

でも、名を聞いてしまったら、私はあなたの味方をしたことになつてしまつ。

それはとってもまずいんだ』

そうだ、ラウルははたと気づく。

ここは魔の森で、子どもはあるトナーシュの民だった。戦争の間ずっと中立を貫き、ビリの国にも敵対しないかわりに、ビリの国の味方もしていない。

たとえ隣国の難民が助けを求めて城門をたたいても、すべて無視を貫いている。

ラウルの胸に、苦い思いが広がる。

あのとき門があいていたら。

せめて物資を堀の外にいる者にも分け与えてくれていたなら、おばあは死なずにするだかもしれない。

急に押し黙ったラウルを見つめ、子どもは心底困った顔をする。

ここに憎しみをぶつけても、何も解決しない。

胸の内の激動を深呼吸で鎮め、かつて村の子どもにしたよっこ、ラ

ウルは子どもの頭をぽんぽんと手の平でたたいた。

思つたとおり、ふわふわの、なんとも言えない良い撫で心地だった。

『あやまらなくていい。

おまえの事情もあるのに勝手を言つたのは俺だ』

言いつつも頭を撫で続ける。

『ううん、『めんね……って、いつまで撫で続けるの?』

微苦笑の後の呆れ顔。

表情がぐるぐると変わる様もおもしろい。

『いやあ、つい、気持ちがよくてな。

昔こじんなさわり心地の猫を飼っていたことを思い出した』

それは幼いころの幸せな思い出。

もう何年も思い出せなかつたのだが、急にあの頃のことを見出しだ。

『わ、私は、猫でも猿でも、亀でも――――――――――――』

今度はまた怒り出した。

猫とは言つたが、猿だの亀だのと言つた覚えはラウルにはない。

……言われたことがあるのだろうか。

いや、あるんだな。

身近な誰かに猿呼ばわりされたに違いない。

こんなおもしろい生き物が側にいたら、毎日楽しいだろう。この子の側にいるだろう家族や友人を思い、少し妬いた。次は笑顔を見てみたいな。

『まあもう少し育てば人間になれるぞ』

子どもの胸当てをつるりと撫でた。

皮を鞣してあるとはいえ、あまりにも真つ平だ。

『 & % # \$ X~~~~~ !』

今度は言葉にさえならなかつた。

ラウルはまたひとしきり大笑いをし、再びすねた子猫をなだめることになった。

ピューライライ

遠くで仲間の指笛が聞こえる。

ラウルがもう戻らねばと言うと、子どもはふんふん怒りながらも、水筒と、なんと馬を貸してくれた。

『この子はアルノー。

とても利口な子だよ。

この子がいれば、天使の森で迷うことはない。

森の出口で離してくれれば、勝手に私の元に戻つてくるから』

ほどよい筋肉がついた、小柄な脚の太い馬だった。  
これなら深い森や、多少の岩場も大丈夫そうだった。

ラウルは『ナーシュの子どもに礼を言い、くしゃりと頭を撫でた。  
やはり良い撫で心地だ。

『無理しないでね』

そういうて子どもは、ふわっと微笑んだ。

ふわふわの髪そのもののような、柔らかい笑みだった。

森を抜け、仲間と合流するかしないかといったところでもた敵襲があり、ラウルは借りた馬にまたがつたまま戦うことになった。  
決して速くはないが、この馬が利口だというのは本当で、怪我をしていた彼をうまく助けて走った。

ふわふわの子どもに手当してもひつた傷は、城に戻るににはすつかりよくなつていった。

致命傷とさえ思つた腹と背の傷で佗へ、ほとんじふせがつていた。

デナーシュの民の不思議の力は本当にあつたのだ。

それとも『10年寿命が延びる』と子どもが言つていた、あの湧き水のおかげか。

戦争が終わり、平和が訪れてからも、アルノーは城の厩舎にいる。ラウルは、落ち着いたら魔の森……いや天使の森の近くで離してやううと思っていたが、あの夢のようだつた泉の一時を手の内に置いておきたいような気がして、手放せずにいる。

小高い丘から天使の森を見下ろし、思い出に浸つていると、後方から呼び声がした。

「ラウル様　！」

警備兵が、よつやく追つ付いてきたようだ。

まさか俺がデナーシュの王女と結婚することになるとは思わなかつたな。

さてどんな態度をとつてやるつか。

あの森とは違つ、暗い笑みが口の端に浮かぶ。  
たつた一人、好感を持てる民に会つたからといって、デナーシュに対する憎しみは消えない。  
この苦しみを、いつか忘れられる日がくるのだろうか。

必死の形相でこちらに向かってくる兵士たちを振り返り、ラウルは一つ溜息をついてから、また「面倒くせえな……」とつぶやいた。

## 5 国境での出来事

「リュシオンヌ様、もつすぐですわね」

王女と共に馬車に乘るコリアが、嬉しそうに叫ぶ。  
国境のある街道を進んで三日目。  
そろそろ腰が痛くなつてきたといふである。

前方に騎馬隊が見えた。馬車が止まる。  
リュシエンヌは、窓越しに会釈をしてきた自国の警備兵に手を振つて、別れを告げた。

続いてオーレリアの警備隊長に挨拶をしよつと外をつかがうと、馬から降りた警備兵たちが、王女たちの乗る馬車のほうではなく、しきりに斜め前方を気にしていることに気付いた。  
整然と並ぶ兵たちの列が、前方から徐々に乱れていく。

「王… おやめください…  
こくらなんでも失礼ですよ」

どよめきの中、するどい声がとんだ。  
何事かとコリアが窓から様子を見ようとした途端、乱暴に扉が開けられた。  
とつせに王女をかばおうとした侍女は、難なく押しのけられ車内に尻餅をつくことになる。

「よお。おまえがデナーシュの王女か。  
俺がオーレリアの王、ラウル＝オーレリアだ」

力に満ちた声。

がつしりした肩。

強い光を秘めた瞳。

黒い軍服に身を包んだ男が、そこにいた。

「……！」

リュシエンヌが慌てて口元を扇で隠すのと、王と名乗った男が後ろから引っ張られて別の男に入れ替わるのは、ほぼ同時だった。

「こんの、馬鹿野郎！ そんな挨拶がありますか！

リュシエンヌ王女、大変申し訳ありません！

私、オーレリアにて宰相を務めさせていただいております、ティエリーと申します」

「……初めてまして。

デナーシュの第一王女、リュシエンヌです」

内心の驚きをひた隠し、リュシエンヌは平静を装つて入れ替わった男に名乗る。

浅葱色の長衣をまとつた男は、長い髪を後ろで結わえ、丸眼鏡をかけていた。

この男が宰相か。

若いな、とリュシエンヌは思つた。

そして、さつきの人。

あれはもしかして 。

「……つてください」

「え？」

「リュシエンヌ様、下がつてくださいー！」

「あつ」

振り返れば、鬼の形相のコリアがいた。リュシエンヌは、侍女の迫力に押され、馬車の中に追いやられる。オーレリアの宰相もまた、馬車から一歩身を引き、跪いて礼をとった。

コリアは馬車から彼を見下ろすと、歴戦の騎士も震えあがるのではという剣幕で怒鳴りつけた。

「ティエリー様、でしたっけ。これがオーレリアのやり方ですか？このお方をどなたと心得ます！」

大陸一の歴史ある大国、デナーシュの第一王女、リュシエンヌ様にあらせられますよ！

即刻、デナーシュの警備隊を呼び戻してください。婚儀は白紙です！

「侍女殿、お待ちくださいー！」

「このような侮辱、たとえ王女様のご夫君になられる方であつても、許されることではありません！」

国に戻り、国王陛下ご報告させていただきますー！」

「コリア、別に私は……」

リュシエンヌは、コリアを落ち着かせようと肩に手を添えると、跪く宰相の隣で、腕組みをして冷えた目線を向けるラウルに気付いた。

「お願い、ゴリア、落ち着いて」

「リュシオンヌ様は黙つててくだれいー。」

「ゴリア」

「じゅあ、また戦争だな」

「ー。」

静かに言い放った王に、その場にいた人々が注目する。

「俺はいいぜ。

『デナーシュに攻め込んで、平和ボケしたおまえのところの兄貴の首をとるまでだ。

それでもいいか、侍女さんよ」

馬鹿、何を言つてゐんだと地に膝をついた宰相は男の足をひっぱるが、そんなことは気にしないようだ。

ユリアは不遜な男の視線を正面から受け、指が白くなるほど拳を握つて肩を震わせた。

「あなた様という方は……！」

「ゴリア、もうこゝわ。代わつてやうだい」

「リュシオンヌ様つ」

リュシオンヌはくしゃじませる侍女を下がらせ血の涙車

を降りると、オーレリア国王の前でドレスの両端を持つて深々と礼をした。

「申し訳ありません。

王自らおいでいただけたとは思いませんでしたので、突然のこと

に侍女が取り乱しました。  
デナーシュの第一王女、リュシエヌ<sup>リュシエヌ</sup>です。

陛下、そしてオーレリアの方々、お迎えありがとうございます」

顔をあげ、ゆつたりと辺りを見回して微笑む。

最後に視線を男に合せて、再度礼をした。

間違いない。

彼は、あの時会った男だ。<sup>ひと</sup>

男の言葉を待ちながらも、リュシエヌの胸に懐かしさが広がる。数年前、森で狩りをしていたときに会った、傷だらけの騎士。もう一度会いたいと思つていた。

手負いの獣のようだった彼を、とにかく手当<sup>ハンド</sup>をし、愛馬を貸して逃がしたが、そのあとどうなったかずっと気になっていた。  
愛馬<sup>アルノー</sup>が戻らなかつたことで、敵の手に墮ちて死んでしまつたかと思つていた。

でももしかしたら、生き延びて彼のもとでアルノーが飼われていたらしいと、淡い期待をしていた。

その彼が、目の前にいる。

しかも、自分の結婚相手として。

リュシエヌはつい喜びをあらわにしそうになつて、慌ててとどまつた。

ここでの、自分があのときの子どもだとわかつてしまつたら、姉の身

代わりができなくなつてしまつからだ。

「ふん。

」の程度のことでは動じないか。さすがはお偉い王女様だ

「……！」

喜びに震えていたリュシエンヌの胸が、一瞬のうちに凍りついた。言われた言葉よりも、その声音があまりにも冷たかった。

「礼儀もくそもない新興国なもんでな。  
お上品な王女様には合わないこともあるだろ？が、あきらめてくれ。

ティエリー、あとはまかせた。俺は執務に戻る

男は黒いマントをひるがえすと、馬に飛び乗り駆けて行つてしまつた。

「ちよつ……王！？」

残されたのは、婚礼用に優美に飾られた馬車とあつけにとられるオーレリア勢。

呆然としたたずむリュシエンヌと、手巾で涙をぬぐうコリアだった。

「なんつ……なんなんですか、の方はッ」

荷ほどきが終わり、一人きりになると、コリアは地団駄を踏みながら叫んだ。

国境からオーレニア城までは、馬車でも一日の距離だった。

王妃のために用意されたという部屋は、上質の調度品で埋め尽くされ、細やかな心配りのできる使用人がついていた。

今日からここでリュシエンヌは暮らしていく。

国境で出会った王の態度から、自分は歓迎されていないのかと思つたリュシエンヌだが、それは違つた。

ティエリーはじめ、オーレニアの人々は温かく迎えてくれて、身一つで来ても何の不自由もなかつた。

「私、何か嫌われるような態度でもとつたのかな」

「そんなことありませんよ！ リュシエンヌ様は立派でした！」

「あいつが失礼なんですよ」

「あいつって、あのね……。

まあ、いいよ、嫌われてるなら顔を合わせることも少ないのでしょ。こここの生活に慣れるまでは、私もどんなボロを出すかわからないから、都合がいい」

「そうですわねえ。もしかしたら、次にお会いするのはお父のときかもしだせんわね」

ユリアは、「冗談で言つたつもりだつた。

しかし、王は本当に一度たりともリュシエンヌの部屋を訪れたことはなかつた。

結婚式当日。

衣装合わせをしたり、式の作法を教わったりしているうちに、あつとこいつ間にその日が来た。

「お腰を締めますので、そちらの柱につかまつてらしてください」

「はい」

ユリアと部屋付きの侍女の手により、婚礼衣装を身に付ける。デナーシュのドレスはゆつたりした古風な意匠デザインなどが、ここ、オーレリアは違つ。

肩を出して胸を強調し、腰はコルセットで細く締め、スカートを大きく膨らませるための腰当クローリーをつける。

「こちらの腕輪はどういたしますか」

侍女が手の平で指示したのは、左腕につけた守護の腕輪。アーリオレジ金細工に宝石がちりばめられており、デナーシュの古い文字で心身の健康と大いなる幸福を願う言葉が刻まれている。

「これは大事なものだから、つけたままでもいいから」

「はい。見事なお品で、王妃様のお美しさを引き立てると思います。ベルに引っかかるということもなさそうですし、大丈夫です」

「ありがとうございます」

リュシエンヌは、侍女の人一人にもきちんと礼を言つ。

使用者だからといって、ぞんざいに扱うことはない。生まれは違えど、彼らも一個の人間であり、職務を全うしようと努力する姿に敬意を払うべきだと思うからだ。

また、そう言つた態度を姉ならとするだろうと考へるからでもある。

誇りを持つて、勤めを果たす。

たとえ、どんなに相手がこちらに背を向けようと

結婚式が行われた神殿は、オーレリア城の敷地内にあった。国境での出会い以来顔を合わせていなかつた男は、はじめにちらりと視線を寄越しただけで、その後は妻となつた彼女を見ることはなかつた。

リュシエンヌも、式の段取りを間違えないようにするので精一杯だつたし、披露宴では各国の使者からの祝辞を受けるのに忙しくて、夫の顔を正面から見ることはなかつた。

そして、結婚式の夜。

リュシエンヌは、『じてじて』とした飾りのついた夜着を着せられて、自室で控えていた。

月はとうに中天にあがり、もはや今夜の王の来訪はないものかと思つたそのとき。

蠟燭の火がほのかに揺れ、扉が開いた。

「陛下……。お待ちしておりました」

リュシエンヌは寝台から立ち上がり、男を迎える。

結婚式でも変わらなかつた真つ黒な衣装は、闇に溶けて彼を隠し  
いものように感じさせた。

男が近付いて来る。

強い酒の匂いが鼻をついた。

「大分……酔われたようですね」

「ああ。こんなこと、正氣でできるか」

「……」

男がリュシエヌの肩を押し、寝台に横たえる。  
裾を割つて、男の手が太ももをなぞつた。

リュシエヌはぞくりと震える体を押さえよつて、せつべシーツ  
をつかむ。

「おまえ、恋人がいたんだる。マルスとかいう

「…」

「そいつとはやつたのか」

「あ、な、何、をで、」ゼロ「まじょうか、陛下」

「何をじやねえよ。

まさか腹にそいつの子どもなんかいないだろつな

「私は……違います」

「何が違つてこつんだ。まあ、してみればわかることだがな。

おまえはどうして嫁に来た?  
兄貴に言われたのか?」

「いえ、私の意志でまいりましたわ」

「ふつ……。そうか。  
国のために恋人を捨てて?  
感心するよ。生糸の王族つてのは偉いね。  
遊ばれて捨てられた男は今頃どうしてるんだ。  
おまえたちには、人の情といつものがないのか?」

リュシエンヌの体をまさぐりながら言葉を紡ぐ男の表情は、どこまでも暗い。

何が彼を変えてしまったのか、とリュシエンヌは戸惑う。  
あの森で会ったときには、こんな顔をする人ではなかつたと思つたのに。

明るい声で笑う、夏の日差しのような人だと思つたのに。

私の、せいなのだろうか

リュシエンヌが自分の物思いに沈みこんで言葉を返さなかつたのをどうとつたのか、男はそれ以上問い合わせることなく、事務的にことを進めた。

ユリアが用意した香油は、多少滑りをよくはしてくれたが、痛みを完全に取り除いてくれるものではなかつた。

破瓜の血が、股を伝づ。

「初めてか。デナーシュの王も酷なことをする」

涙に頬を濡らしながら、リュシエンヌが見たのは悲しげな青い瞳。軽蔑以外の色を初めて浮かべた男は、しかしリュシエンヌを温めてくれることなく、身辺の始末をすると、すぐに扉の外へと消えて行つた。

「う……ふつ……く……」

扉が閉まつた途端、一時は堪えていたものが、一気にあふれてきた。枕に顔を伏せて声を殺し、リュシエンヌは引き裂かれた痛みに耐える。

なぜこんな扱いを受けるのか。

政略結婚とはいえ、妻として迎えられたなら、それなりの愛情は持つてもらえたと思っていた。

姉だつたら違つたのか。

美しい姉。

愛する人を見つけた姉。

身代わりを申し出たのは、姉の役に立ちたかったからだが、もしかすると、自分も姉のように愛し愛される人を得られるかも知れない

とこう思いがあつたのかもしれない。

騙そりなんて、思ったのが悪かつたの　?

答えをくれる者などいるはずもなく、空が白み始めるまでリュシエヌの嗚咽は続いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9127z/>

身代わり王女の恋物語（なろう版）

2012年1月5日19時49分発行